

# 生存科学研究 ニュース

VOL. 7. NO. 6.

1992. 11. 10. 発行

発行 財団法人 生存科学研究所

〒104 東京都中央区銀座4-5-1

聖書館ビル 303

電話 03-3563-3518

## 会員研究会 「生死と生存」第3回 生態系における人類の位置

9月4日(金)午後2時より、生存研会議室において会員研究会「生死と生存」第3回が開催され、「生態系における人類の位置」をテーマに、東大名誉教授産業医科大学名誉教授八巻敏男氏が以下の話題で講演した。

人類は地球という刻々変化する物質圏—地球生態系—の中において、植物を出発点とする物質循環系の推進機構の担い手になっている。その人類は、年率1.7%で増加しているが、食糧の主要生産を担っている農地は0.7%の増加にとどまっており、世界人口の15%が飢えにさらされるという食糧不足の危機がうかがえる。

地球上の有機物は、植物の炭酸同化の産物で、ここに植物の重要な役割があり、その地球生態系維持における重要性も明瞭である。森林破壊は、人間によってかなり強力に進められている。このような人間の勝手な行為に対する反省がなければ、やがて人類は生態系を乱し、その報いを受けることになる。

## 第3回東西の健康観・医・薬研究会 西洋薬の開発と漢方薬の開発

9月11日(金)午後1時半より、第3回研究会が開催され、表記のテーマで科研フェルマ取締役・原田謹爾委員と鐘紡薬品医療用漢方開発部・松田敏明委員により報告がなされた。

原田委員は、新規物質の探索から臨床試験までの西洋薬の開発過程を説明し、企業間の開発競争、技術的問題への対応、種々のガイドラインの意義、薬としての承認審査過程など、具体的に述べ、また、薬は“物と情報”の組み合わせであり、現在は市販後調査も重要とされ、承認後も薬の有効性・安全性に関する情報が連続して収集されなければならないことを強調した。

松田委員は、この10数年に急速に伸びを示した医療用漢方製剤の経緯を紹介し、その間の品質・安全性・有効性に対する、学会・業界・行政当局の、また最近の再評価の動きを説明した。

日本では「医療用漢方製剤の取り扱い」(1980)の通知以後、新しい医療用漢方製剤は承認されていない。他委員を含めてこの通知の技術面の妥当性、漢方製剤の消費を抑制するという意図の是非とその有効性、対費用効果研究の重要性等が議論され、漢方薬に対する体系的な薬事行政の発展が必要であろうとされた。

平成4年度 第1回  
環境・保健・産業問題研究会  
実践的調査研究方法とその検討

9月24日(木)午後3時より、平成4年度第1回研究会が開催され、表記のテーマで東海大学師岡孝次教授の発表と参加会員の討議が行われた。

師岡講師は、環境問題を捉えるうえにも、医療の品質管理(院内感染等)を行うためにも、焦点を絞って定量的なデータを収集することにより、問題への実践的アプローチが可能だと思われるが、関係者の利害関係の調査を行うことが重要であると発表。

他の委員からは、環境問題が人体の健康にどう影響するかを探る研究の重要性、それには環境自体の変化とその中で生活している人間の健康の変化の両方を追及することの必要性が強調された。また、財団側から、生存を考えるためには環境、保健、産業を包括的に考えるという財団の設立目的とも関連して、地域的な集団を対象とした調査研究と、それを基盤に生存の包括的研究を進める一般的方法論の構築への、この研究会に対する期待が述べられ、それに関連して財団が行っている大分での調査プロジェクトの説明があった。

第2回 生存秩序と人間関係研究会  
秩序について

10月1日(木)午後6時より、従来の家庭問題研究会から名称を「生存秩序と人間関係」に変更した研究会の第2回が開催された。今回は、理化学研究所理事長小田稔氏が、宇宙物理学の立場から「秩序」についてどう考えているかを話した。

小田氏は、「秩序」というと一般には、整然とした、規則性の明確なものを考えるが、最近、混沌(カオス)にもある種の規則性があると言われるようになった。それは気象学

者ロレンツが、気象現象をコンピュータ計算したことから始まる。単純な方程式の幾つかに支配される気象現象をコンピュータに解かせると答えが色々にでる。同一条件と考えられる初期条件であるのに結果が大きく違ってくる。このことから、ある条件が隣の条件と複雑に絡みあう連立方程式、非線形(ノン・リニア)の方程式では、初期条件の僅かな差で結果が大きく変わってくるのが分かった。それ等は、乱雑のようだが良く見ると規則性があるように見える、と前置きしてから、複雑なようで法則性があり、法則があるが複雑で掴みようがないという実例として、ボイジャー衛星の撮影した土星の筋、海王星の輪、天王星の4つの月の軌跡、爆発したカニ星雲、太陽の爆発現象などの写真等を提示した。そして、このように規則性が分かってきた、あるいはありそうな、決定論的カオスとでもいうべき乱雑さにこそ本当の秩序があるのかもしれないとして、今これに強い関心が集まっていると紹介。気の早い物理学者は20世紀の物理学は相対論と量子力学とカオスであるというかもしれない、と結んだ。

最後に、物理学者として自分は、生命体を、一つにはエントロピーを減らす機械と、今一つには(爆発という過激な非線形の反対にある)極端に静かな非線形であると考えている、と述べた。

第3回 医療問題研究会  
I. 漢方における「体質」  
II. 西洋医学における「体質」  
個人と臨床医学  
: 薬理遺伝学的アプローチ

10月13日(火)午後3時より、第3回研究会が開催され、北里大学村属東洋医学総合研究所大塚恭男所長から表記I.のテーマで、九州大学生体防衛医学研究所臨床遺伝学部門鈴木友和氏から表記II.のテーマで、それぞれ発表がなされた。

まず、座長の星薬科大学粕谷豊学長から、

21世紀を迎えての医薬を研究するには、マスとしてよりも個の医療が重要視され、体質が問題となる。それについて両講師から話をうかがう事にした、と説明があった。

大塚講師は、幸田露伴先生が漢方について「人間が生命を続けているかぎり、自身の体内で自己を守るあらゆる複雑な操作が行われているという前提のもとに、それが病人にどのように現われているかということを考え」と言われたと、武見太郎先生が漢方医学雑感に書かれているが、これは漢方の『症』を見事に言い表わしたものであると紹介。次いで自らの論文を引用しながら、気、気味、虚実、陰陽等につき簡潔に説明。さらに漢方の日常診療での個々の症例の症候を重視する態度を紹介した。

鈴木講師は、まずアルカプトン尿症を発表したサー・ギャロード博士の「(遺伝病は)科学的個性の極端なもの」という言葉を紹介。それは個人の体質の差であり、人の個人差は連続的なものとしてとらえられるべきであることを説明。その例として、英国人の酵素の特性につき、ある遺伝子の酵素に関する遺伝的特性のなかで、最もありふれた形質の組み合わせをもつ確率でさえ0.06%でしかないということを紹介。また薬物療法における人の個性と体質が、遺伝的変異によることや、遺伝学的に人の薬理学的個性を明確に知ることの必要と、そのための技術の進歩を紹介。自らの研究も含め、実際の薬について現在の研究の最先端を披露した。最後に、将来の課題として、薬剤の副作用情報の分析整理と、新しい薬理遺伝形質の発掘、ならびに、薬理遺伝学の普及の必要性を強調した。

### 会員研究会 「生存と経済」第3回 先端医療の社会受容

10月22日(木)午後2時より、江見康一教授を座長として、会員研究会「生存と経済」第3回が開催された。テーマは「先端医療技術の社会受容」で、講師は東海大学工学

部師岡孝次教授。

講師は、病院経営工学の立場から、日米の医療の比較、リスクマネジメント学会や危機管理学会の情報、自らの教室での研究成果等から、モスクワの病院での眼科白内障手術の流れ作業方式、講師等が開発したコンピュータとロボットによる無人薬局、乳癌の類似症例を集めての手術、病院のQC活動等の実例を、社会適応や生産性の観点から紹介し、以下のように主張した。

先端医療技術が社会に適用されるとき色々問題が起こるが、それが社会に受け入れられるためには、働く人の創意を取り入れることと、調査分析により隘路を除去し、理想にむかって社会レベルにまで機能展開していくことが重要である。それと同時に、日本における医療従事者の過重労働の解消、設備投資の充実、品質管理機能の向上が必要である。

発表後の質疑では、医療における生産性の意味が、医療における個別性、試行錯誤の必要、得られる健康度の上昇、患者の満足度等との関連で討議された。

### バイオサナトロジー学会発足

生存科学研究所の「生死と生存」研究委員会は、生死にかかわる諸問題に「生存の理念」を導入し、生への新たな取組と関連して、死に関する諸問題の洗い直し等を広く社会的啓蒙活動とするために、バイオサナトロジー学会を設立するべく準備を進めていたが、10月4日(日)発足総会を開くに至った。

午前中、総会議事で先ず、生存研土屋健三郎副理事長(前産業医科大学学長)をバイオサナトロジー学会の会長に選出。午後、新会長による発足挨拶、主旨説明があり、続いて3時間におよぶエリザベス・キューブラ・ロス博士の特別講演会を開いた。会場、すみだリバーサイドホールは約800人の超満員で、お断りする方が出る盛況であった。

夕刻、発足祝賀会と、E・キューブラ・ロ

ス博士の歓迎を兼ねたレセプションを開き、和気あいあいのうちにも熱気に満ちた1日であった。

「生死と生存」研究委員会の責任者としてバイオサナトロジー学会発足準備に重要なメンバーとして努力したト部委員は、「これからは、会員募集の正念場であり、時節柄、資金繰りも苦しく、何かと生存研にも御助力を仰ぎながら、きちんとしたリンクのもとに発展することを願っている」と述べていた。

### 九州プロジェクト 別府訪問

生存研、九州プロジェクトの「人間性回復都市別府」総合科学的研究メンバーが、10月3日(土)、4日(日)の両日、別府市を訪問し、別府市長、市の各部門担当職員等多数と会合。先ず市長から別府市の現状説明が行われ、研究が本格的にスタートした。同行したメンバーは以下のとおり。

青木 清 上智大学生命科学研究所所長  
田村貞雄 早稲田大学社会科学部教授  
岡本 暁 愛育病院小児科部長  
寄本勝美 早稲田大学政治経済学部教授  
土方正夫 早稲田大学社会科学部教授  
戸沼幸市 早稲田大学理工学部教授  
向山定孝 三井業際研究所常任委員  
鈴木雪夫 多摩大学経営情報学部教授  
杉田 肇 大分県医師会副会長  
伊東孝廣 別府市医師会会長

続いて10月24日(土)、「第4回ノーベル賞受賞者日本フォーラム」に来日中の生存研顧問ワシリー・レオンチェフ教授が、小平専務理事、東海大学師岡教授、田村教授等と共に別府市を訪問、現況を視察した。

### 西日本シンポジウム 開催 予報

生存科学研究所西日本センター(責任者・山口正民副理事長)の活動がいよいよ開始され、12月、大阪において次の要領のシンポジウムを開催するはこびとなった。

### 生存科学研究所

### 西日本シンポジウム

主催: 生存研 西日本センター

後援: 大阪府医師会

テーマ:

「21世紀の健康都市大阪を目指して」  
—都市化への健康政策—

日時: 12月5日(土) 午後2時~5時

場所: 大阪府医師会 4階講堂

シンポには、大阪府医師会植松会長、阪大医学部森本教授、京大経済学部西村教授等が参加の予定。生存研のビデオも紹介される。会員多数の参加をお待ちする。

### 研究所日報

8月20日(木) 環境・保健・産業研究会  
小委員会

9月 4日(金) 常務理事会

9月 7日(月) 編集委員会

9月28日(月) 理事会(持ち回り)

ハーバード大学武見講座活動報告

報告者 吉田フェロー

Takemi Program Seminar

9/21 Human Crisis and Security/L.C.Chen

9/30 Epidemiological and Social Issues  
of AIDS/ H.Fineberg

10/5 Data for Decision Making/J.Walsh

10/14 Research Communication/G.Gleason  
Research Presentation

9/24 Dilemma of Health Policy Reform in  
Bangladesh/J.B.Mendis

Takemi Luncheon

9/21 Special Luncheon; Introduction to  
Takemi Program

10/1 International Conference on Popu-  
lation Aging/D.Obikeze

10/15 Preliminary Research Presentation  
/ M.Prakasanna

10/22 Luncheon with the Takemi Program  
Advisory Committee Members